

## 認定子ども園への期待

センター長（学長） 無藤 隆

総合施設「認定子ども園」がいよいよ発足する。国のガイドラインと自治体による認可基準を元に平成18年度の後半ないし19年度から全国で本格的に開設されていく。大きな期待とまた危惧を感じているところである。

何より、様々なニーズを抱えた保護者の求めに応じた柔軟な施設運営が期待される。短時間の幼稚園程度と長時間の保育園程度の双方の預け方が可能になるわけだが、その中間の時間帯とか、時々長い時間とか、そういった必要もあるに違いない。また逆に無用に毎日長く預けることもない。もちろん、そうなると保育の中でどのようにクラスを編成するか、遊びを仕組んでいくかといったことで難しい点は出てくる。しかし、これからの保育はそういった柔軟な組み方の中での工夫が必要になるのだと考える。

幼稚園と保育園の本格的な統合の可能性を具体的な保育のあり方に即して追求してほしい。教育という体系と福祉という体系の融合はそう簡単なことではなく、国レベルでの統合は当分期待できない。だが、具体的な日々の保育にあっては、統合化は可能なはずであり、だからこそ子ども園が成り立つ。既にモデル園の中の優れたところでは、幼稚園の保育と保育園の保育のそれぞれの伝統を踏まえつつ、双方のよい点を合わせていく工夫が進んできている。幼稚園と保育園と元々は異なる趣旨で設立されてきたのだが、幼稚園は福祉面の強化を進め、保育園は教育面にも力を入れる中で、実態として接近せざるを得なくなっているのである。そのよきモデルを期待したい。

幼保の総合化の中で幼児教育は乳幼児期全体に広げられ、そのカリキュラムが作られていくことになる。発達は乳児から児童期まで一貫した流れとして生じている。またそこでこの指導のあり方は時期毎に少しずつ異なるものの、小学校入学前までそれほど異質に分かれる時期があるわけではない。少しずつ集団での目的的な活動へと移行していく。保育内容の5領域が小さい年齢ではどうであるのか。また小学校にいかにして発展するのか。子ども集団のあり方はどう変わるか。保育指針で基本的な年齢毎の特徴は記述されているが、さらに、実践に基づき、保育指導に立ち入りつつ、発達の流れを明確にしてほしいのである。

子ども園では特に子育て支援の拡充を進めていく。幼稚園・保育園でも努力してきたのだが、しかしとうてい十分とは言えなかった。特に、3歳未満の幼稚園にも保育園にも行っていない親子への支援が望まれている。親子登園クラスを作り、しかもいつでも通えるように毎日開設してほしいのである。保護者の保育参加や保育運営への参画などももっと広げてほしい。子どもの保育中の様子を記録をとって、保護者に伝えることももっと活発化

する必要がある。子育て支援が保育と密接につながり、相互補完し、相互にその有効性を支え合う関係にあるのだという認識が肝腎なのである。

子ども園で上記の様々な試みを努力しつつ、しかも保育そのものの質を維持し、また改善していく。行政によってはあるいは安上がり保育を是認し、あるいは奨励さえするかもしれない。そうではなく、保育の最低限満たすべきレベルを明確にし、各々の地域で提言していくことが保育に関わる実践者や研究者に求められることである。もとより、理想的な基準をただ掲げても実現性がない。実現が可能なところで、しかし、出来る限り、ちゃんとした質を求めるべきだろう。そのために、保育者の一定以上の雇用の安定や経験年数の考慮、また園内・園外の研修を通しての保育の改善の努力が大事になる。外部の研究者などを招き、保育を検討してもらおう試みも是非行ってほしい。